

「女作」とするものである。ドイツのリュールマン著の翻訳である。ついで同年七月、同じ書店から『普通看病学』を出す。原著はビルロートである。さらに同年十二月三十日発行、同じ吐鳳堂から『珠氏産科学』巻一を出す。これはカール・シロエデル Karl Schroeder (ベルリン大学)の著を訳したもののだが、彼が『日誌抜萃』に「珠氏産科書翻訳ヲ約ス」と記したのは同年六月一五日で、彼は内地勤務とはいえ、日清戦役で軍務に服しているときである。本書の序言が明治廿九年一月となっているから、実際の刊行がこの年であることは、『日誌抜萃』二月一日に「珠氏産科学第一冊出版ス」と記している点からも明らかだが、それにしても早い上梓である。ちなみに巻二は同廿九年八月、巻三は同三十年四月に刊行された。

文献 長門谷洋治 佐伯理一郎とその『日誌抜萃』日医史誌
三五・一三八、一九八九

(大阪府豊中市)

草壁系諸帝の病迹くさかべ

稻垣 直

天武天皇の諸皇子は秀れた才幹の所有者が多かっただけに、皇位への競望の念もそれぞれに強かった事が推察される。

そのような背景の中で、皇后鸕野讚良皇女は自己の所生である草壁皇子くさかべを即位せしめ、その後は皇子の子孫を以て順次、皇位を嗣がせて行く事を企図、まず草壁皇子の立太子に成功された。(但し古代の皇太子は現在のそれとは若干意義が異なる。)

ところが皇子は即位を前にして二十八才にて薨ぜられたので、皇后は自ら即位し持統天皇し、治政一〇年の後、草壁皇子の長子珂瑠皇子かろを、十五才の少年であるにかかわらず即位させし文武天皇し、自らは太上天皇として共同統治

を行われた。持統上皇は大宝二年（七〇二）崩ぜられるがその直前まで、活発な政治活動を行って居られたから、急死というに近く、脳血管傷害か心疾患が想像される。

文武天皇もまたその後を逐うように宝算二十五を以て崩御。おそらく草壁皇子は開放性肺結核で、文武天皇はそれに感染されたものであろう。

その時、文武天皇の遺子である首皇子はいまだ七才であったので、母親たる阿閼皇女が登極―元明天皇―。即ち天皇から皇太后に相当する女性への讓位という前後に類を見ぬ異常な皇位繼承を行い、あくまで、草壁一門による皇位の確保に努められた。

元明天皇の和銅八年（七一五）、首皇子は十五才に達し、父の文武天皇の例に倣えば即位の可能性も考えられたが、何故か、その姉である氷高皇女への讓位が行われた―元明天皇―。ただ元明天皇は退位の理由として、皇位に在る事に疲労を覚えた事を挙げていながら、実際には太上天皇として養老五年（七二二）の崩御に至るまで、国政に關与して居られる。

元正天皇の在位八年の後、漸く首皇子の即位を見たが―

聖武天皇―、天平十二年（七四〇）に藤原広嗣が大宰府に拠つて叛するや蒼惶として平城京を脱し、東方諸地域を転々とした後、山背国恭仁京に遷都されるに至った。

しかも更に近江国紫香楽の地に離宮を造営するかと思えば、転じて難波京に奠都、約五年間、是等各地を彷徨するごとく移動されたため、群臣を始め庶民達の困惑は頗る大なるものがあつた。結局、天平十七年（七四二）、平城京に還都されるが、その際、難波京において大漸に至るかと思われながらたちまち恢復して平城の地に還幸されて居る。

その後も不子を称される事、しばしばであつた事は史書に明記されて居り、天平二十一年（七四九）に阿倍皇女に讓位―孝謙天皇―、太上天皇となられてからも同様の状態が続き、天平勝宝八歳（七五六）には崩御される。その間、東大寺を始め各処への度々の行幸もあり、要するに天平十七年前後から約十二年間、常に病床に在り続けた訳ではなく、軽快と増悪を繰返しつつ長期間を経過している点、悪性腫瘍、脳血管傷害、心疾患等いずれも考え難く、それに先立ついわゆる「五年間の謎の彷徨」の事実とも考

え併せると、寧ろ情動不安ないし自律神経失調症のごとき状態が繰返されていた可能性が強いと思われる。

元明天皇よりの直接の讓位が廻避された事も、少年時代から既に情緒不安定のごとき状態があつたためではなからうか。

いまだ四十九才の壮齡にかかわらず孝謙天皇への讓位が行われた事を健康状態と結び付ける事も出来よう。

光明皇后は夫帝の病状を見て、既に天平年間後半期から政務に関与されていたものごとく、更に聖武天皇の讓位によって皇太后となられると、寵臣の藤原仲麻呂（惠美押勝^か）と計り、本来、政治の中枢たるべき太政官の実権を奪うような、強大な権力を持つ「紫微^{しび}中台」なる官署を新設、万機を親裁されるに至った。（孝謙天皇讓位の宣命に「皇太后朝」の言辞のある事はその間の消息を暗示するものと考えてよい。）

而して天平宝字四年（七六〇）、光明皇太后崩ぜられるや、間もなく藤原仲麻呂の叛乱が起り、それを契機に孝謙太上天皇の復活となり―称徳天皇―、政界は新局面を迎える。

奈良時代は「天平美術」、「天平文化」等の語句で印象付けられる華やかな半面を持つ一方、権力の中枢にある人の不健康状態に大貴族達の政治的野望が絡み、「激動の天平」ともいふべき絶えざる政情不安に悩まされる暗い半面を持つていたのである。

要するに、草壁系諸帝によって平穩に支配されて行くべき筈だったこの時代は、男帝の相断ぐ夭折、多病のため、持統、元明、元正の三天皇及び光明皇后の四人の女性達によつて準備され、維持されねばならぬ結果となつた事、又、後年、藤原氏が政界に圧倒的大勢力を築き上げるに至つた縁由の一つが、これらの女性達との密接な關係にあつた事、を史実に即して検討する。

（東京大学医学部）